

# 質問の種類

今回は“質問の種類“について話をしていきます。

質問には大きく分けて2つの種類があります。それは、“開かれた質問”と“閉ざされた質問”のふたつです。

開かれた質問	閉ざされた質問
質問に対する答えが決まっておらず、 相手が自由に答えられる質問（5W1H）	「はい・いいえ」など、相手の答え方が 限られる質問（Yes/No）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ たくさん情報が欲しい</li> <li>・ 相手に考えさせたい時</li> <li>・ 話や発想を膨らませたい時</li> <li>・ 話や発想を掘り下げていきたい時</li> <li>・ 視点を変えたい時</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 相手の口が重たい時</li> <li>・ 答えや論点を絞り込む時</li> <li>・ あいまいな発言のポイントを絞る時</li> <li>・ 決断をせまる時</li> <li>・ 理解/合意を確かめる時</li> </ul>
<p>【例文】</p> <p>「皆さんの意見を聴かせてください。」</p> <p>「〇〇するために、どのような方法がありますか」</p> <p>「もう少し具体的に教えてください」</p> <p>「すべての制約がないとすれば、何ができますか」</p>	<p>【例文】</p> <p>「今の意見には賛成ですか」</p> <p>「確認ですが、〇〇ということによろしいですか」</p> <p>「このアイデアを採用しますか」</p> <p>「それは事実ですか？あなたの考えですか？」</p>

どちらが良いとか悪いではなく、その場の目的に合わせて使い分けることが必要です。例えば、発想を広げたり、アイデアを具体的にしたいなら”開かれた質問”を使い、話題を絞り込んだり、確認をしたりするのであれば”閉ざされた質問”を使うという風に使い分けます。

以前、この”ダイアログの教科書“で投稿した”問い“と”質問”の違いですが、”問い“はスタンスを表すもので、必ずしも疑問文ではありません。”質問“はその瞬間を切り取って、立ち位置や状態などを示すためのもので、基本的に疑問文でつくられます。

私も最初は質問の種類をととても意識しながら相手に質問していたのですが、今は自然と頭に浮かんでくるようになりました。私がダイアログの場をつくるのであれば、その場はコントロールの無い場を目指したいので、質問も無意識から頭に浮かぶというカタチが望ましかったので。頭で考えた質問には意図が含まれることがつい多くなってしまいます。

相手に気づきを与えるというよりも私がお話を詳しく知りたい、そういう思いで質問することが、ダイアログの場では多いと思います。とにかく立ち位置が対等であること、その状態がダイアログの特徴であり、対等な関係性だからこそ、お互いの想いを尊重し合い、相互理解を深めていけます。

これは、ついつい忘れがちになってしまうことなのかもしれません。なぜならば、正しさを強く求めたり、優劣をついつくってしまったりと、日常の中にあまりないものであり、そもそもこの世は不公平にできているので。今ここで提唱しているダイアログの場は、人と人は存在としては対等であり、その関係性の中でお互いを探求し合う場ということなのです。

なので、もし質問に角度があるとしたら、上からとか下からではない、同じ高さにいる、存在として対等な人間になげかける、そんな質問がダイアログの場では

いいです。年齢の違いや立場の違いなど、いろんな立ち位置があるとは思いますが、それを超えてできる限りまっすぐに。そして高圧的でなく、卑屈にもならず。

例えば、否定したい気持ちなんかも、質問に出たりする訳です。日本語はとても微妙なニュアンスを表すのに長けていると思っています。人文字変わるだけで全然変わるので。それを違いとして受けとらない方も多いとは思いますが、潜在的には”あれ？”という違和感を持たれることもあります。

こんな風に話していると、質問すること自体考えてしまうかもしれませんが、質問があることは相手にとって興味を持っているという証です。興味があるからもっと詳しく聴いてみたい。へたに質問をして変なこと聴いてもね、とか、わかったふりをして、勝手に理解したつもりになること、その方が失礼なのかもしれません。

それに、そもそも人って、今気づくと大変なことには気づけない、ある視点から見ればとても便利な最終防衛本能を持っているのです。だからといって、何を言っても傷つかないとかというわけではありませんが、問い詰めるような詰問や尋問でなければ、基本的には大丈夫でしょう。それを信じてとにかくいろんな経験を積んでください。頭で考えてイメージするより、それが一番の学びになりますので。

最後にもうひとつ、相手ではなく自分に質問することを簡単に話させてください。自分に質問することで、考えるのとは違った答えを得ることができるのです。

答えは言葉じゃなくても良くて、例えばモノや景色などのイメージや、音や匂いなどなど、五感に訴えかけるものを受けとってみて、例えばそのイメージが質問の答えだとしたらどういう意味を持つのかを考える、もしくはもう1度質問してみればいいのです。

いい質問には答えが含まれると言われていています。質問を口にした瞬間にワクワクしてしまうような、そんな質問をぜひ日常的にして、日頃のダイアログライフをより良いものにしてみてください。